

## ディスコグラフィー収録

### ディスコグラフィー【2021No.178】(HP 収録)

分類：LP

作曲家：ヨハン・セバスティアン・バッハ

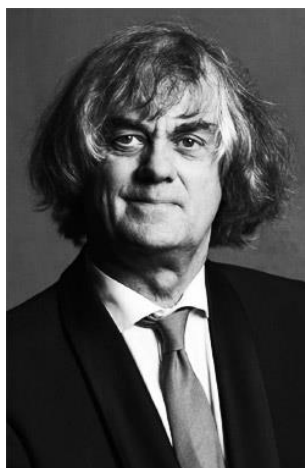
曲：管弦楽組曲 1 番・2 番・3 番・4 番

演奏：ジギスバルト・クイケン指揮ラ・プティットバンド

発売：ACCENT

No. : KKC1115/1116

概要：



ネット上には下記のような説明があります。

「シギスヴァルト・クイケン&ラ・プティットバンドが『管組』を再録音！

本当の音を追求するクイケンのこだわりが結実した1枚！

古楽界の巨匠シギスヴァルト・クイケン率いる名門古楽アンサンブル、ラ・プティットバンドによるバッハの管弦楽組曲が発売されます。1972年にS.クイケンとG.レオンハルトにより結成されたラ・プティットバンドは、メンバーチェンジなどを経て2012年には40周年を迎えました。

彼らは1981年に管弦楽組曲を録音しており、この再録音は31年ぶりの再録音ということで、その間の絶え間ない研究や技術の向上が結実したものとなっています。そして通常2枚組で販売されることの多い管弦楽組曲ですが、クイケンならではの快速テンポで1枚に収め、爽快で生き生きとした演奏を聴かせてくれます。

今回も作曲された当時の響きを再現するために、S.クイケン是最小編成のアンサンブルで、基本的には「1パート1人」で演奏し、各声部の進行をより明白にしています。通奏低音はチェンバロの他に、いわゆる8フィートのヴィオローネと言われるチェロの前身の楽器バス・ド・ヴィオロンが使用されています。さらに特筆すべきはブ

ランデンブルク協奏曲 (ACC24224) の時と同様に、バッハの時代の純正な響きを再現するために、何年もかけて探した優秀なバロック・トランペット奏者ジャン＝フランソワ・マデフを起用し、調整バルブがないナチュラル・トランペットを用いている点です。また 1981 年の最初の録音と同じく第 2 番ではバルトルド・クイケンがソロを務めており、繊細で柔軟な香り高い演奏を披露しています。(キングインターナショナル)」

#### 【収録情報】

J.S.バッハ：管弦楽組曲 (全曲)

- ・第 1 番ハ長調 BWV.1066
- ・第 3 番ニ長調 BWV.1068
- ・第 2 番ロ短調 BWV.1067
- ・第 4 番ニ長調 BWV.1069

バルトルド・クイケン (トラヴェルソ)

シギスヴァルト・クイケン (指揮) ラ・プティットバンド

録音時期：2012 年 9 月 29 日～10 月 1 日

録音場所：ベルギー、シント・トルイデン、ベギンホフ教会

録音方式：ステレオ (デジタル/セッション)

ZANDEN のリストには、ACCENT レーベルの情報がないので、まずは、RIAA の正相から聴き始めます。定位は問題なく、逆相にすると散漫になりますので元に戻します。

イコライザーカーブは RIAA のままでも良さそうですが、試みに、TELDEC、EMI、Columbia、DECCA と切り替えてみると、いずれも余分な響きに乗ったり、焦点がぼやけますので、元の RIAA に戻しました。第 4 時定数も High のままで良さそうです。録音が 2012 年と新しいので、RIAA の正相で良いことに納得がいきます。

第 1 番、第 3 番、第 2 番、第 4 番と聴いて行きましたが、いずれも明るく明晰で、いかにも現代のバッハの解釈といった印象です。

全般的にきびきびとした小気味よいテンポの演奏ですが、第 3 番のアリアはバルトルド・クイケンの透明度の高いしっとりとした表情を見せます。

第 4 番のように、ラ・プティットバンドの総出で次々と受け渡しする曲では、手練れのメンバーの技量が冴えています。

以上